

初年次教育の効果と課題： スポーツ科学科「フレッシュマンセミナー」の事例から

春日芳美、田中博史、只隈伸也、佐藤真太郎

Outcome and Additional Challenge of First-Year Experience: Practical Case of Department of Sports Science

Yoshimi KASUGA, Hiroshi TANAKA, Shinya TADAKUMA, Shintaro SATO

1. はじめに

本学スポーツ・健康科学部スポーツ科学科（以下「本学科」とする）では、学部設立当初の2005年4月より初年次教育の一環として、新入生を対象とした必修科目を置いてきた。本稿では、現在行われている本学科の初年次教育の中心科目である「フレッシュマンセミナー A/B」（設立当初の名称は「基礎演習」）の概要を示すとともに、2013年度に行われた本科目の成果と課題を、授業内で行った学生による授業評価アンケートの内容をもとに明らかにする。

本学では各学部において工夫を凝らした初年次教育が行われているが、残念なことに学内でそれらの成果の共有がなされておらず、知識やノウハウの蓄積が不十分であるといえる。本学科におけるフレッシュマンセミナー（以下、「本科目」とする）は、「教育の大東」という目標を遂行する上でスタート部分に位置づけられる重要な科目であり、この成果と課題を共有することは、大学教育の質的転換や「アカウントビリティ（説明責任）」の重要性が指摘される昨今にあって、よりよい大学教育のあり方を検討するために非常に重要であると考えられる。

2. 初年次教育に関する研究動向と本学科「フレッシュマンセミナー A/B」について

2-1. 日本における初年次教育

初年次教育（First-Year Experience）が日本において注目を集めるようになったのは2000年代半ばのことであり、ここ十年間で著しく広まったといわれている¹。

¹ NII 学術情報ナビゲータ CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>) では、「初年次教育」で検索すると2003年以降の論文・雑誌・図書データとして2014年9月現在857件の記事がみられる。

「初年次教育が、入試の難易度を問わず多くの大学で導入されるようになった背景は、①学生の容容、②政策的側面の変化、すなわち大学をより教育を重視する場へと変革しようとする政策の存在、③教育効果の提示といった内在的および外在的な圧力の存在という3点に収斂できる」(初年次教育学会編、2013)

初年次教育とは、大学・短大における一年目の教育を指すものであるが、大学教育が専門教育としてのみあるのか、普通教育を含んで成立するのかという点で、日本の大学の成り立ちと現代的課題が影響している(館、2013)。「世界の大学の初年次教育には、専門教育として始まるヨーロッパ型と、普通教育で始まるアメリカ型がある」が、日本の場合は第二次大戦前にはヨーロッパ型、戦後は「一般教育あるいは教養教育という名称で普通教育を大学に取り込んで、アメリカ型へと転換」(館、2013、p.29)した。この転換において生じた混乱により、日本では初年次教育に未だ明確な位置づけを見出していないとの指摘もある(館、1991)。現在では、中央教育審議会(以下「中教審」とする)による2008年の答申「学士課程教育の構築に向けて」の中で「初年次教育は高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」として明記されている²。高度経済成長期には、企業は大学に多くを期待せず入社後に人材育成を行うという認識が比較的広く存在していたが、現在では企業も学生が大学において何ができるようになったのかを問うようになっている(中教審、2012、p.10)。近年では大学生に「学士力」を身に付けさせ、大学教育の質的転換をはかることの重要性が指摘されており、初年次教育を「学士教育課程」のプログラムの一部として捉え、「明確な教育目標の設定とこれに基づく体系的な教育課程の構築」(中教審、2012、p.17)のために4年次までの一貫性のある教育プログラムを形成していくことが求められると考えられる。このような一貫した教育プログラムを構築する上で、初年次教育は学生の学びの基礎をつくるものとして重要な意味をもつ。次項以下では、本学科においてフレッシュマンセミナーが設置されるに至った経緯と、その教育のポリシーがどのようなものであるのかを示したい。

2-2. 本学科「フレッシュマンセミナー A/B」設置に至る経緯

初年次教育の一環として行われている本科目は、一年次必修の基礎教育科目であり前期のAと後期のBで行われている³。

本学科においては、学科設立当初の2005年4月より初年次教育を行うための科目として「基礎演習」を置いていた。この科目では担当教員を9名とし、9クラスの開講によって少人数制の授業

² 具体的な内容としては、「レポート・論文などの文章技法」、「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」、「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」、「学問や大学教育全般に対する動機づけ」、「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」、「図書館の利用・文献検索の方法」などが示されている(中教審、2008)。

³ 一年次に本科目の両方、もしくはどちらか一方の単位取得ができない場合には、二年次必修科目である「スポーツキャリアセミナー A/B」の履修をすることができない。

を展開していたが、授業を通して何を学生に伝えたいのかという具体的なポリシーがなく、教員間で指導内容にばらつきが出てしまうなどの問題があった⁴。また、2007年度までは専門教育の基礎を学ばせることに大きく偏った内容であり、学科としてこのままの教育内容で良いのかという疑問が一部教員から投げかけられるようになっていた。これを受けて2008年度には、学生の学力向上を目指すのであればまず学生の学ぶ者としての姿勢を正す必要があるという学科内での共通理解に至った。そして、2009年度の新カリキュラムより基礎演習の内容を一新して「フレッシュマンセミナー A/B」を設置することとなった。

本科目では、対象年次を一年次とし、「基礎演習」では少人数で行っていた運営形態を学年全体の合同で行うこととした。担当教員4名全員が授業に参加し学生指導に当たっている。また、毎回の授業では、始業の挨拶、校歌斉唱、スチューデントポリシー Big hand 斉唱（詳細は次項で説明）、終業の挨拶を励行し、遅刻厳禁（遅刻者の教室入室は認めない）、居眠りの禁止、課題提出の締切厳守、持ち物等に関する準備の徹底、メモを取ることの徹底等を指導している。また、「基礎演習」時に教員間に指導の差が出たことの反省を活かし、担当教員全員がこの指導内容を重視する姿勢を貫くことを周知している。

2-3. スチューデントポリシー Big Hand 作成の経緯

スチューデントポリシー Big Hand は、アドミッションポリシーの内容と大学入学後の学科での教育ポリシーのコンセンサスを得るために作成したもので、本学科における学生教育の核となるものである。本学科のアドミッションポリシーは、1. スポーツ科学を学ぶための十分な基礎学力を有する人、2. 生涯にわたりスポーツに関連したことに携わり、スポーツを通じた社会貢献をめざす人、3. 本学スポーツ科学科に対して深い理解があり、未来の夢をかなえるための熱い情熱を持ち行動するパワーのある人、4. 課題達成のために自ら学ぼうとする高い学習意欲を持ち、論理的に問題解決することに継続的な努力ができる人、5. 人と人のつながりの重要性をよく理解し、それを重んじて生活している人、という5点からなり、本学科はこのような受け入れ方針で選抜された学生の集団であるということを念頭に置いて教育することが必要であると考えられた。

そこで、高いコミュニケーション能力を有する→HARMONY（ハーモニー）、基礎的学力を有する→KNOWLEDGE（ナレッジ）、帰属意識→PRIDE（プライド）、スポーツを通じた社会貢献DEDICATION（デディケーション）、熱い情熱・高い行動力と強い責任感→PASSION（パッション）として、受験生を対象としたアドミッションポリシーから在学生を対象としたスチューデントポリシーを制作した（資料1）。学生は、授業開始時に校歌斉唱とともにこのスチューデントポリシーを斉唱し、本学科の学生に求められる姿を日々イメージすることになる。なお、後に検討するアンケートの分析結果からも、学生がスチューデントポリシーを意識し体現しようとする傾向が見受けられた⁵。

⁴ 2011年第5回FDフォーラム 田中博史「スポーツ科学科『フレッシュマンセミナーの紹介』」ppt資料より

2-4. 本科目の指導プログラム

本科目における重要な点の一つとして、学生の活動の様子を複数の教員によって日々観察することで学生様子を常に理解し、学科内で共有するということがある。初年次教育プログラムの到達目標として「学業と生活の両方を充実して過ごせるように支えること、大学というコミュニティの一員である感覚を学生同士が共有すること」(山田、2013、p.25)が挙げられるが、学科内の複数の教員や学生と関わりをもつことにより長期欠席者や学習意欲の低下している学生の早期発見につながり、初期段階での対応が可能になっている⁶。以下は、2013年度に行われた本科目の内容である(資料2)。

・ポストカードの作成

入学式に全体写真を撮影し、それを印刷してポストカードを作成している。各学生に保護者へのコメントを記述させ、回収して一括して郵送している。

・ハンドブックの活用

大学から入学関連資料とともに入学予定者に郵送される「大学生になるためのハンドブック」を活用している。「大学生活をどのように送ればよいかわからない」という漠然とした不安をもつ新入生は多いが、このハンドブックを活用することによって大部分の問題を解決することが可能である⁷。

・マナー講習

外部講師を招いて挨拶やマナーについての講習を行っている。この講習を行った後には、学生の側から積極的な挨拶が行われるなど学内での挨拶に劇的な変化がみられる。

・地域奉仕活動(地区清掃)

以前はボランティア活動として行っていた高坂駅から東松山校舎までの清掃活動を、地域奉仕活動という名称に変更した。本学科の学生は4年間東松山校舎で学ぶこともあり、歩いて清掃活動を行うことにより地域への理解を深めるとともに愛着をもつことにつながる。

・各種講演

学外から講師を招き、職業選択や学生生活を有意義に送る方法等を検討する機会としている。2013年度は教職関係者(現職高等学校校長)、企業関係者(株式会社クレーマージャパン)に講演を依頼した。学生は、これらの講演を通して、実社会の現場がどのような状況であるのか、またどのような能力が社会で求められるのかということを知ることができる。

この他に、本科目設置の経緯でも触れたように、毎回の授業において始業の挨拶、校歌斉唱、スチューデントポリシー斉唱を行い、毎週の課題として「天声人語書き写しノート」の提出を義務付

⁵ スチューデントポリシーについては、これを強要することによって学生の「個性」が失われるのではないかという指摘もある。しかし、本学科においては、これらはあくまで学生に必要とされる基礎部分の教育であると認識しており、「個性」はこの基盤の上に成り立つものであると考えている。

⁶ 本学科では学年担任として各学年に2名の教員を置いており、これらの教員と連携して長期欠席等の学生への対応を行っている。

⁷ テキストを使用しながら、学部事務室と学科事務室の違いや、情報収集の方法、掲示板の場所などもレクチャーする。

けた。なお「天声人語」は、朝日新聞朝刊に掲載されているコラムであるが、特定の思想によりこのノートを使用しているのではなく、学生の語彙や文章力を高め時事問題に興味をもたせるきっかけとして簡易なツールであると判断し利用している。また、授業中はメモを取ること、居眠りをしないこと、授業以外の作業（いわゆる「内職」）をしないこと等を指導している。

3. アンケート結果の分析

3-1. 全学学生授業評価アンケートの結果分析

2013年12月2日から7日にかけて行われた「学生による授業評価アンケート」（2013年度で12回目）における、全学1年生のデータと、本科目のデータの比較を行った（図1）。

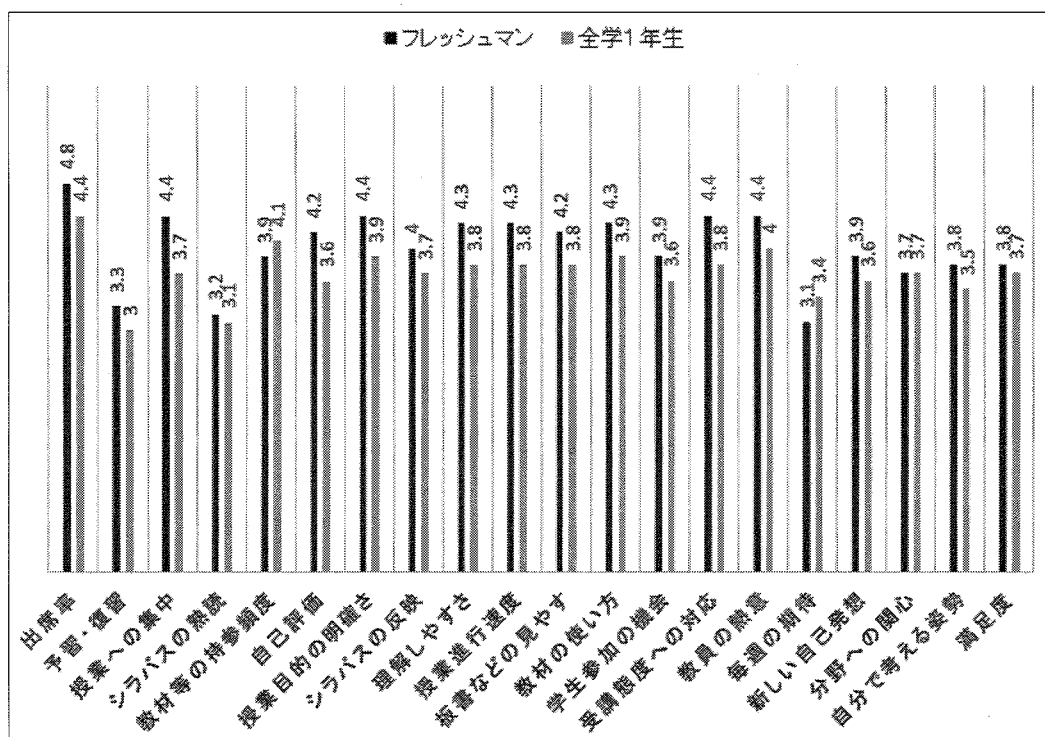


図1 全学アンケート比較結果

この結果、出席率、授業への集中、自己評価、授業目的の明確さ、受講態度への対応、教員の熱意といった項目で比較的高い評価が得られた。これは、2-2. で触れた毎回の授業内容が成果として表れていると考えられる。

・出席率

1限の授業であるが、遅刻厳禁とし遅刻者の教室への入室を認めないことによって、多くの学生が時間的余裕をもって教室に入室している。遅刻厳禁とすることで、朝寝坊しないということを学

生が意識しており、それが高い出席率につながっていると考えられる。また、本科目では授業への出席を重視しており、特別な理由なく欠席が全授業数の3分の1を超えた場合は次年度の再履修となるため、単位取得のために出席率が高いと考えられる。

・授業への集中

授業では、始業の挨拶の段階で学生の集中が不十分な場合には、起立からやり直しをしており、授業開始から集中が求められている。また、居眠りの厳禁、メモを取ることの徹底という指導によって、自然と授業に集中していると考えられる。

・授業目的の明確さ、理解しやすさ

毎回の授業で、何を目的として授業を行うのかという説明を行っておりその点が授業目的の明確さの項目に反映していると考えられる。また、リメディアル教育や聞き取りによる要約など、基礎的な能力を高めることを中心とした授業内容である点が理解しやすさにつながっていると思われる。

・受講態度への対応、教員の熱意

受講態度への対応としては、居眠り、着帽、机上の荷物、私語、携帯電話の使用、姿勢、その他メモや課題への取り組みといった様々な点で適宜指導をしており、態度が改善されない場合には当該授業の受講を継続させない判断をすることがある。これらの対応が、受講態度への対応として高い評価につながっていると同時に、教員の熱意としても評価されたと考えられる。

このように、高い評価を得た項目については、教員側が意図的に行っている教育内容が回答に反映していると考えられ、今後もこの内容を継続していく裏付けとなった。

一方、予習・復習、シラバスの熟読といった項目は評価が低く、特に毎週の期待については学年の平均を下回った。この点への対応として、現在初回授業において行っている授業日程の説明に加えて、シラバスを用いてガイダンスを行うことを検討している。また、授業にとりかかる前の準備段階での授業内容の周知徹底などを行い、場合によっては翌週までの簡単な課題レポートなどを課すこと等も今後の課題として検討されている。なお、毎週の期待について評価が低い要因としては、授業態度について厳しく指導を行っていることが関係していると考えられる。今後この項目の評価を高めるためにどのような方策が必要であるのかを検討していく必要があるだろう。

3-2. 自由記述によるアンケート結果の分析

2014年1月に授業内で行った「フレッシュマンセミナーに関するアンケート」⁸では、「スポーツ科学科では、なぜ必修科目として「フレッシュマンセミナー」を実施していると思いますか。その理由と考えられることを自由にご書いてください」という質問を行った(資料3)。これは、1年間の授業を通して学生が何を学んだのか、教員の意図をどのようにくみ取ったのかということ

⁸ 実施日2014年1月7日(火)1限、回答者数108名。回答用紙は無記名とし、個人が特定されないよう工夫して実施した。

知るための質問である。この結果を担当教員4名で、以下のスチューデントポリシーの5つの項目と「その他」の計6つに分類した。HARMONY (H)：コミュニケーション能力に関する項目、KNOWLEDGE (K)：基礎的知識や技能に関する項目、PRIDE (Pr)：帰属意識に関する項目、DEDECATION (D)：地域や社会に対する貢献に関する項目、PASSION (Pa)：情熱、行動力と責任感に関する項目。これらを各項目の頭文字をとってH, K, Pr, D, Paと表記し、複数に分類される回答もあった(図2)。

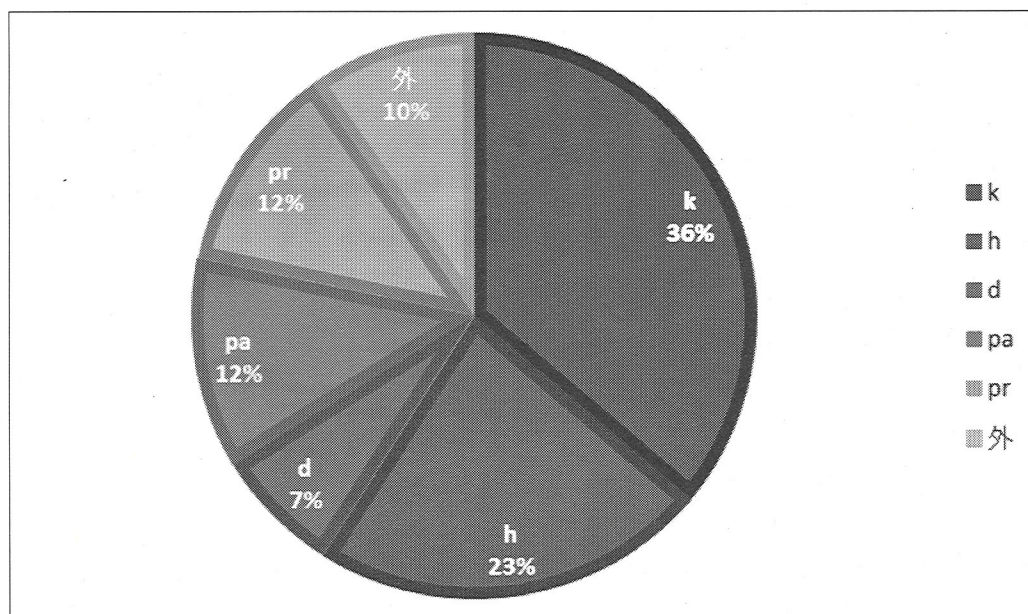


図2 質問1 回答分析結果

回答の一部を抜粋すると、「大東の学生として誇りをもって、どのように行動していくか考えさせる授業 (Pr)」や、「大学生としての自覚をもたせ、あいさつやマナーなど将来必ず必要になるものを今のうちから身に付けさせるため (H)」などの他、「他学部にはない初年度教育を行うことによって、正しい基本的習慣、コミュニケーション能力の向上、キャリア教育、帰属意識の向上を図り、将来に役立てるため (H, K, D, Pa, Pr)」と全ての項目を満たすような回答もみられた。

この結果から、学生はK (知識) についてはよく理解しているが、本科目内ではD (社会貢献) について理解することが難しい傾向があるように読み取れる。しかし、初年次教育である本科目では、将来的に社会貢献するための基礎的知識を深める段階であるともいえ、この傾向は大きな問題ではないとも考えられる。

なお、分析の結果「外」と判断された回答では、「学生として大切なことを教えるため」、「社会に出て苦労しないため」等、間違いではないが教育意図を十分理解していないと考えられるものがあった。

3-3. 授業に期待していたことと受講後の変化

授業に期待していたことがあったかという質問に対しては、期待していたことがある48名、期待していたことはない58名、未回答2名であった(図3)。

期待していたと回答した理由としては、「大学生はだらしなかったり、さぼりがちなイメージだったけど、この授業はそういうことが一切許されないのでもっとしっかりとした大学生になれると思ったから」、「大学がどういったところなのか、どういうことをやってるのかわからなくて不安だったのでそういうことを教えてもらえると聞いていた」といった回答のほか、「名前がかっこよかった」、「名前が楽しそうだったので」といった回答がみられた。

一方、期待していたことがなかったという回答の理由としては、「フレッシュマンセミナーのことをよく理解してなかったので」、「どんなものかわからなかった」といった回答が複数みられた。また、「授業態度、遅刻などに厳しいと聞いていたから」、「先輩に一番大変な授業だと聞いていたから」等、上級生からの話を聞いて厳しい授業であると予想していた場合や、「スポーツ科の先生が集まるから堅苦しいだろうと思った」といった意見もみられた。

質問3の、本科目を受講してよかったかという問に対しては、105名がよかった、2名がよくなかった、1名が未回答であった。

受講してよかったという回答としては、「朝早くに起きて1限に行く習慣がついたから」、「受講していなかったら、もっと怠けた生活を送っていたから」、「遅刻厳禁によって授業に遅れるということが他授業においてもほとんどなかった」等、大学生としてよい生活習慣が身についたとする回答が複数みられた。

また、「要約やレポートを書くことが多かったので、自分の考えを書くことに慣れた」、「たくさんレポートや天声人語を通して考える力と書くことに対しての抵抗がなくなったから」、「書くことが苦ではなくなった」といった回答がみられた。パソコンやスマートフォンを使用する機会が多く講義中ノートを取ることに對して「疲れる」等の意見が出されることがあるが、1年を通して天声人語や授業内でのトレーニングをつむことによって効果がみられることが明らかになった。

そして、マナーが身についた、メモを取る習慣が身についた、やるべきことはきちんとやるという姿勢が身についた等、意図的に指導を行ってきた点を指摘する回答が多く、成果として認められるだろう。この質問の回答については、質問5の受講後の自身の変化についての記述と重複するものが複数あり、学生は本科目を通して得られた自身の変化を肯定的に受け止めているということが示唆された。

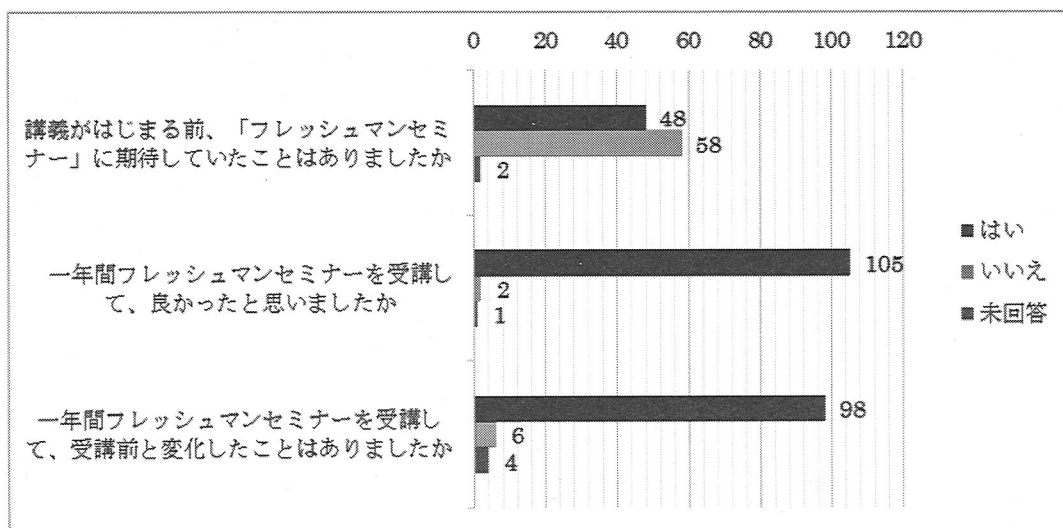


図3 質問2,3,5 回答

3-4. 最も印象に残った授業内容

質問4の本科目で最も印象に残った内容では、一分間スピーチが最も多く挙げられた(図4)。理由としては、「ほぼ初対面の人達の前で自分を主張するのはとても緊張したから」等、「人前で話す」ことの難しさについての記述が多く見られた。

次点として挙げられた大東ウォーク2013は、大学創立90周年ということでイベントの形式が例年とは異なり、板橋校舎から出発して九段、青砥、池袋の校舎跡地を電車等の交通機関を利用しながら巡るというものであった。大東ウォークについては、例年イベントへの参加によって1回の授業参加とみなしている。回答としては、「友人と楽しく大東文化の歴史が学べた」と、大学の歴史を知ることができたことに対して肯定的な意見が複数みられた。また、クラスの友人との仲が深まったという意見も多かった。

地区清掃活動については、非常に肯定的な回答が多く予想外であった。「一人ではできないことなので定期的にやれてはよかった」、「大変ではあったが、地区の人に貢献ができてよかったと強く思えたから」、「はじめはめんどくさかったけど、ゴミを拾いながら地域の人とコミュニケーションをとれたり、今まで話すことのなかった人とも話すようになった」等の回答があった。地域貢献や、学生間でのコミュニケーションの機会となったことが学生の印象に残ったと考えられる。

また、各種講演については「いろいろな人の話を聞けて、自分にあてはめたりとても貴重な話が多かったから」、「ひとつひとつの講義が本当に大切なことを言っていた。メモもたくさんとれて今後の資料となった」など、これからの自分の進路を検討する上でのモデルとして講演者の話を聞いていた様子が明らかになった。

マナー講習についても多くの記述があり、「この講習がなければわからないことがいっぱいだった

た」、「初めて知るマナーも多くて、とても勉強になった」等、この講習を通してマナーや礼儀についての気づきがあった学生が複数みられた。また、「普段習う機会がないから」、「あまりちゃんと教わる機会がないのでよい経験になった」等、やる気がないのではなくマナーや礼儀について考えるきっかけがなかったことを指摘する回答があった。

その他としては、毎回の提出を義務付けていた「天声人語書き写しノート」に対して「つらい」などの回答がみられたが、他項目の回答においてこの課題への肯定的な回答が複数みられたことを付記しておく。

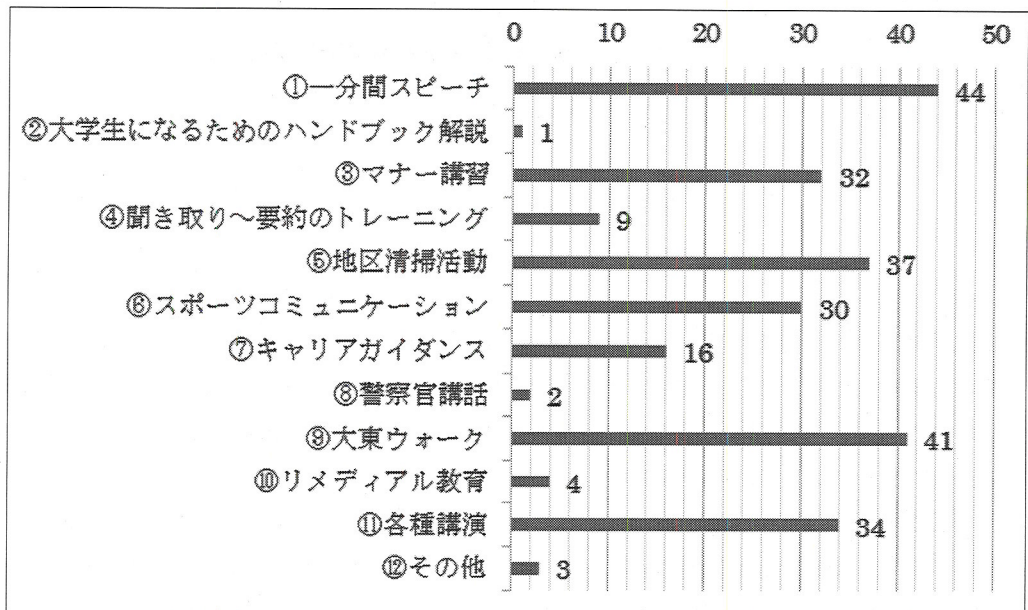


図4 最も印象に残った授業内容

3-5. 受講前との変化について

一年間本科目を受講して変化があったかという質問に対しては、98名が変化があった、6名が変化がなかった、1名が無回答であった(図3)。

変化があったとする回答としては、「早起きをすることができるようになった」「時間を気にするようになった、余裕をもつようになった」というような回答が複数みられた。火曜1限の授業であり、遅刻厳禁、特別の事情なく出席数が不足した場合は単位取得ができないことから、学生は特に寝坊をしないということに注意を払っていた様子であった。また、「授業中に寝ない」、「マナーなど当たり前のことができるようになった」、「メモを取る習慣がついた」、「校歌を覚えた」といった、授業内で意図的に指導してきたことについて記述する回答が多数あった。そして、「受講前は高校4年生だったけど、受講後は大学1年生になれたと思う」、「自分がどうありたいか考えるようになった」、「自分の将来について考えるようになった」といった、自身の成長や今後のあり方についての

記述も散見された。

変化がなかったとする回答としては、「実際、わからない」、「実感がない」といった意見がみられ、このような学生に対してのアプローチとしてどのような方法があるのかを検討する必要があると考えられた。

4. おわりに

以上のように、2013年度に行われた「フレッシュマンセミナー A/B」の成果と課題について検討を行った。その結果、「学生の学力向上を目指すのであればまず学生の学ぶ者としての姿勢を正す必要がある」という考えに基づき設置された本科目の目的は、学生にも理解されおおむね達成されていると考えることができるだろう。

2013年度は新カリキュラムの完成年度でもあり、本稿をこのカリキュラムの成果と課題を示しさらなる改善を進めていくための第一報としたい。今後は、新入生の入学直後に学科独自で行っている「スタートアッププログラム」⁹の効果についても検証を進め、次年度以降も継続的な調査及び報告を行う予定である。

文献

- 初年次教育学会編（2013）初年次教育の現状と未来．世界思想社，まえがき
- 館昭（1991）大学と一般教育．大学研究（8），筑波大学研究センター，8-15.
- 館昭（2013）高等教育における初年次教育の位置づけ．初年次教育の現状と未来．世界思想社，29-41.
- 中央教育審議会（2012）答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」
- 山田礼子（2013）日本における初年次教育の動向—過去、現在そして未来に向けて．初年次教育の現状と未来，世界思想社，11-27.

（2014年9月26日受理）

⁹ スタートアッププログラムは、入学式後の2日間を用いて新入生の大学や学部学科に対する理解を深め、学科の教員や同級生との交流を図ることで学生生活のスタートをより円滑に進めることを目的としたプログラムである。フレッシュマンセミナーの導入としての意味合いもあり、今後この効果を検証していきたい。

Student Policy Big Hand

-  **Harmony**
私たちは、人々の調和を重んじ、高いコミュニケーション能力を発揮できます。
-  **Knowledge**
私たちは、専門知識と幅広い一般教養を兼ね備えています。
-  **Pride**
私たちは、大学を愛し、所属することを誇りに思っています。
-  **Dedication**
私たちは、スポーツ・文化活動で得たことを元に多くの人へ貢献できます。
-  **Passion**
私たちは、熱い情熱、高い行動力、強い責任感をもって行動できます。
- Our Future**
私たちは、これらを持っている大きな手で未来をつかみます。



 **大東文化大学**
DAITO BUNKA
UNIVERSITY
スポーツ・健康科学部
スポーツ科学科

初年次教育の効果と課題：スポーツ科学科「フレッシュマンセミナー」の事例から

	月日	内 容		月日	内 容
A	4/9	ガイダンス、ポストカード作成	B	9/17	ガイダンス
	4/23	1 分間スピーチ (A・B クラス)		9/24	地区清掃活動
	4/30	1 分間スピーチ (C・D クラス)		10/1	キャリアガイダンス
	5/7	大学生になるためのハンドブック 1		10/8	講演 (教員)
	5/14	大学生になるためのハンドブック 2		10/15	講演 (企業)
	5/21	マナー講習 (初級編)		10/22	キャリアガイダンス
	5/28	地区清掃活動		10/29	警察官講話 (SNS について)
	6/4	講演 (企業)		11/12	小論文 (大東文化大学について)
	6/11	聞き取り～要約をまとめる 1		11/19	リメディアル教育
	6/18	聞き取り～要約をまとめる 2		11/26	マナー講習 (上級編)
	6/25	3 教科 (国語・数学・英語) 試験		12/3	ウォーク 2013 代休
	7/2	3 教科試験復習		12/10	スポーツコミュニケーション
	7/9	スポーツコミュニケーション		12/17	講演 (企業)
	7/16	夏休みを迎えるにあたって		1/7	スポーツ関連ドキュメンタリー視聴
				1/14	ウォーク 2013 代休

資料 2 2013 フレッシュマンセミナー A/B スケジュール

フレッショマンセミナーに関するアンケート

このアンケートは、スポーツ科学科1年次必修授業であるフレッショマンセミナーに関するものです。アンケートは、本授業を検証し、今後に向けた改善のヒントを得ること等を目的として行われます。匿名方式で実施するので、個人が特定されることはありません。率直な感想や意見を回答してください。

1. スポーツ科学科では、なぜ必修科目として「フレッショマンセミナー」を実施していると思いますか。その理由と考えられることを自由に書いてください。

2. 講義がはじまる前、「フレッショマンセミナー」に期待していたことはありましたか。
はい . いいえ (いづれかに○)
その内容や理由について自由に書いてください。

3. 1年間フレッショマンセミナーを受講して、良かったと思いましたが。
はい . いいえ (いづれかに○)
その内容や理由について自由に書いてください。

4. フレッショマンセミナーの内容の中で、最も印象に残っているものは何ですか。○をつけてください。(最大3つまで)

- ①1分間スピーチ ②大学生になるためのハンドブック解説 ③マナー講習
④聞き取り～契約のトレーニング ⑤地区清掃活動 ⑥スポーツコミュニケーション
⑦キャリアガイダンス ⑧警察官講話 ⑨大東リョーク ⑩リマザイアル教育
⑪各種講演 ⑫その他

その理由を教えてください。

番号	印象に残っている理由

5. 1年間フレッショマンセミナーを受講して、受講前と変化したことはありましたか。
はい . いいえ (いづれかに○)
その内容や理由について自由に書いてください。

6. その他、フレッショマンセミナーについて書きたいことがあれば自由に書いてください。

設問は以上です。ご協力ありがとうございました。